

【東京】「本当は口腔外科に入りたかった」東大卒開業医がこう話す理由-山下巖・医療法人社団「法山会」理事長に聞く◆Vol.1

2021年2月19日（金）配信 m3.com地域版

医科と歯科を院内に併設し、外来診療だけでなく在宅医療も行う。キャッシュレス決済とオンライン診療を早期に導入し、現在はPayPayでの支払いやLINEでのオンライン診療も可能。自由が丘と大塚に二つのクリニックを展開する医療法人社団「法山会」理事長の山下巖氏からは、開業医として患者目線に立った経営を追求する姿がうかがえるが、「本当は口腔外科に入りたかった」と本人からは意外な言葉。ユニークなクリニックに成長した経過を辿る。（2020年12月11日インタビュー、計3回連載の1回目）

▼第2回はこちら

▼第3回はこちら

――まずは、医療法人社団「法山会」の概要についてお聞かせください。

当法人は、自由が丘駅と大塚駅の近くに立地する「山下診療所」を運営している法人で、大きな特徴は院内に医科と歯科を併設していることです。1964年に歯科医師である私の母が自由が丘で歯科医院を開業し、1975年に大塚にも展開。その後、医師である私と私の姉が診療と経営に参画し、1994年に両院に医科を新設、現在の形の土台を作りました。

私が医科を立ち上げた大塚では現在、内科のほか小児科と耳鼻科も標榜しており、また2002年ごろからは在宅医療も行っています。2016年にはオンライン診療も始めました。1日の来院患者さんの数は多いときで大塚の医科が120人ほど、歯科が70人ほどで、自由が丘はその半分くらいです。在宅医療で管理している患者さんは現在、3、4人で、オンライン診療を行っている方は新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の影響で4月と5月は大塚院だけで月に100人ほどに増えました。現在は1日数人、月50人ほどに落ち着いています。

法人に在籍するスタッフは約70人です。姉は途中で独立したため、医師は私と半常勤の小児科の先生1人のほか、非常勤の先生が20人います。歯科医師は常勤が7人、非常勤が10人です。大塚の医科は原則2診療体制で、1診は内科、もう一方が小児科または耳鼻科で、それぞれ専門医の先生も診療しています。



理事長の山下巖氏

――歯科を併設するクリニックは全国的にも珍しいと思います。なぜ、お母さまが運営する歯科医院に医科を設けようと考えたのでしょうか。

臨床の現場から医科と歯科の連携・融合を試みようと考えたためです。発端は私の父（山下一郎）にあります。父は私が小さなころから長く東京大学口腔外科教室の主任助教授を務め、また日本口腔科学会の専務理事でもありました。「主任助教授」というのは教授がいない中でのポジションであり、「専務理事」というのもまた理事長不在での立場でしたので、実質的に両組織を統括していました。

父は東京医科歯科大学歯学部出身で、学生だったころに同大初代学長の長尾優先生に薫陶を受けたようなんですね。長尾先生は東京大学医学部を卒業した医師でありながら歯科の重要性にいち早く気付いた奇特な方で、海外などで歯科学を学び、日本の同学問の発展に大きな貢献をされました。父はこの長尾先生に大きな影響を受け、「医学の一分野として歯学を確立させたい」という理念を育てていました。

私は子どものころ、自宅でタバコを吹かしつつ目をつむって思索にふけったり、口腔や顔面が人間の尊厳に及ぼす影響やそこにメスを入れる外科医の責任などを熱っぽく語ったりする父の姿を目にしてきました。そんな場面を通して、子どもながらに父の“医療人”としての真摯さを感じたのです。そして、私も成長するにつれて父が直面するさまざまな課題を理解するようになり、私自身は医学の側から、つまり医師として医科と歯科を包含した形で医療を確立したり、医科と歯科の橋渡しをしたりしたいと考えようになりました。

——そんな経緯があったんですね。すると、最初は開業医というより学問の世界で活動したいお考えがあったのでしょうか。

そうですね。私は高校卒業後に東京大学に進みましたが、同大学は「医科と歯科の融合」という課題に取り組むに当たって、歴史的な因縁もあります。同大学を飛び出した島峯徹、長尾優といった先達が近代日本の歯学を築き、その過程で東京医科歯科大学が誕生したと聞いているからです。自分のテーマのいわばメッカとも言える場に進んだ私は卒業後、口腔外科に入局しようと考えました。歯科と口腔外科を学ぶとともに、外科や耳鼻咽喉科、頭頸部外科などの診療経験を積むことで、医科・歯科双方の知識と技術を高められるだろうと思ったのです。

——医学部を卒業した後に歯科分野への入局を希望した人に初めて会いました。

珍しいでしょう。こんな行動を取る人はめったにいないと思いますが、残念ながら私の願いは叶いませんでした。医師の口腔外科入局が制度として何か問題があったわけではありませんが、新しく赴任した教授いわく、「体制が整っていない」という理由で却下されたのです。

私の行動は学内でちょっとした騒動になりました。当時はまだ学生の自治意識があった時代です。基本的に医局は理由なく学生の希望を断らないルールがあったため、私の考えに共感してくれる仲間たちが、「山下を口腔外科に入局させないのはけしからん」と集会を開いて教授に訴えてくれたり、また、私の希望を学年の総意として大学に問うための活動を行ってくれたりもしました。ただ、当然ながら大学の権力を恐れる人もいて、学生間で投票を行った結果、数票差で「圧力で解決をしない」という結論になりました。「それならば」と私は大学院の試験を受け、口腔外科の専攻志願を出しましたが、これも同じ理由で志望先の変更を余儀なくされました。

こうした大学側の判断は、父を巻き込んだ教授選出の問題が影響していたのだと思います。先ほど話した通り、父は長く東大口腔外科の主任でしたが、私が大学を卒業する数年前に教授選考が行われ、他の診療科から来た教授が着任していたのです。当時は種々の謀略が働いていましたから、父の考えに共感する私の存在も疎ましく思われたのかもしれない。



同院では歯科と内科の受付が分かれており、待合室も分離されている

——時代を感じさせるお話ですね…。希望を断られた後は？

学生のころから研究室に入出入りしていたご縁を頼りに、免疫学の教授を務めていた多田富雄先生にご相談したところ、私の窮状をご理解いただきました。「私が守ります」と院生として受け入れてくださいました。その上、私が外科系の臨床医を目指していたことから、東京大学医学部附属病院の第一外科で研修することも許していただきました。

第一外科での濃密な研修は私の臨床の基礎を作ってくれましたし、また免疫学の大学院では、NIH（米国立衛生研究所）から戻ったばかりの中山俊憲先生の指導により、インパクトのある研究をすることができました。ちなみに多田先生は文筆家としても活躍し、1984年に文化功労者に選ばれた多才な方です。一方の中山先生は先日2020年11月に千葉大学の学長に選ばれました。

そんな経緯を経て大学院を修了した私は、「今度こそ口腔外科に入局できるのでは」と期待しました。しかしながら結果は…。このときはさすがにこたえましたね。学生のころに比べれば臨床医・研究者としての基礎を身に付け、博士号まで取得していたので、「問題ない」と思っていましたから。しかし、結果的に口腔外科に絡む希望を三度も断られたわけで、「なぜだろう…」と。季節は春でした。気持ち良い日々と沈んだ自分の気持ちの対照が今でも思い出されます。

——それから、町の開業医として再出発したということでしょうか。

いいえ、すぐに気持ちを切り替えたわけではありません。それからは学生時代にお世話になったことがある癌研究会附属病院（現がん研究会有明病院）の頭頸科に無給の立場で所属し、研修を行いました。その一方で、母が運営する歯科医院で歯科の臨床も始めましたが、私は医師ですから、「もっと医師としての活動も」という思いがありました。そこで、歯科医院に耳鼻科を新設したのです。当時は今は違ってインターネットは普及しておらず、また私の専門性も深くはありませんでしたから、本当に地道に、一人ずつ患者さんを診ていく日々でした。

開業医としての意義や自信を深いところで感じられるようになったのは、それから10年以上たってからでしょうか。この間、プライマリ・ケアに関する知識や技術を深めるために講演会に足しげく通い、また、漢方にも関心があったため医師会の講演会に登壇されていた専門医の先生の外来を見学させていただくなどして、漢方専門医も取得しました。耳鼻科や小児科の領域も様々な機会を利用して実地研修をしつつ診療の幅を広げました。そんななか、恩師の多田先生からご自身の終末期における在宅医療を依頼されたことは大きな転換点だったと言えるかもしれません。自分のこれまでの営みが「間違っていないのでは」と思えるようになったためです。

私はこちらのクリニックに参画してから母や勤務していた歯科医師、父の教え子だった東大口腔外科の先生方に歯科・口腔外科の治療を学び、今でも医科と歯科双方の診療に従事しています。特にインプラントについては、ハーバード大学やスイスのベルン大学のコースに参加するなどして技術の向上を図ってきました。思うに、医科と歯科それぞれの視点が分かることは医療人としては貴重なことかもしれません。当院に勤務する歯科医師と治療方針を議論するに当たり、自分自身が診療できることは重要な要素だと思いますし、また内科や耳鼻科において歯科との関連疾患を診るに際しても、歯科領域の深い知識は生きるからです。

学生時代の友人たちは、あれから30年以上がたった今も歯科に関わり続けている私の姿を見て、「山下が言っていたことは嘘じゃなかったんだな」と応援してくれているのではないのでしょうか。私が心臓を患ったときにステントを入れてくれた医師がそんな友の一人であり、私の術後、彼の抜歯やインプラントは私が執刀しました。互いに違う道を選んだものの、今では医科・歯科を通じたそんなつながりがあることを考えると感慨深いものがありますね。

◆山下 巖（やました・いわお）氏

1989年東京大学医学部卒。東京大学医学部附属病院第一外科や癌研究会附属病院（現がん研究会有明病院）頭頸科などを経て、母が経営していた「山下診療所」（自由が丘、大塚）の診療に本格参加、1994年に同院に医科を併設する。2008年、母体の医療法人社団「法山会」理事長に就任。医科歯科連携や在宅医療、キャッシュレス決済やオンライン診療を早期に導入・実施するなど、開業医として患者目線に立った経営を追求する。

【取材・文・撮影＝医療ライター 庄部勇太】

記事検索

ニュース・医療維新を検索

